

# 学校点描<sup>プラス</sup>

保護者やご来賓の方々はマスク着用ですが、生徒と教職員は3年ぶりにマスクなしの卒業証書授与式とします。

《K中学校》

NO.18 (最終号) R5. 3. 9

担当：校長

2月16日（木）は2学年で、Y市から井上聡子医師（さとこクリニック院長）を招いて性教育講話をいただきました。健康な体を守ることは自分の未来を守ることに繋がることになります。

第20回斎藤茂吉ジュニア短歌コンクールで中学校の部58首に、M・Sさんの歌が選ばれました。

『「大堰」に 群れてはしゃげる鯉たちは パン競い合い 鱗かがやく』指導して下さったK・A先生もきっと喜んでくれているはずです。

今年より公立高校の一般入試は、3月7日（適性試験がある学校は8日と2日間）になりました。長年、3月10日に実施されていた入試が3日早くなったわけです。理由は、当日インフルエンザ等で受検できない生徒のための、追試験が12日（適正試験がある学校は13日と2日間）に用意されたためです。追試験で受検することがないように、学校全体で予防に力を入れてきました。そして無事全員受験しました。

3月14日（火）に、同窓会入会式を行います。同窓会長のK・K様から3年生に激励の言葉を頂く予定です。会に先立って、K・Rさんが最後のスクールツアーを行ってくれます。いよいよ卒業です。

## 点描の精神

今年も、あと2日で、3月11日が来ます。

2011年3月11日の大地震と大津波。あの日から、早12年が経ちました。当時中学3年生だった生徒たちは、27歳になっています。伝えていくということは、あのときの記憶を忘れないで持ち続けることなんだなあと思います。

今年の3年生の修学旅行は、コロナ感染拡大もあり、東京から福島県に場所を変えて、震災研修を旅行目的の1つとして実施しました。残念ながらデイズニーランドでの思い出はできませんでしたが、東日本大震災の爪痕が今も残る場所を見て回って、生徒ひとり一人が感じた思いは、きっといつか必ず貴重な体験だったと実感できる日がくるはずです。

特に震災遺構として保存している浪江町立請戸小学校の姿は、相当インパクトが強かったようです。男子生徒のY・Jさんは、こんな風に旅行直後の記録ノートに書き込んでいました。

僕は修学旅行で福島県に行くまで「福島県は東日本大震災で起きた、原発事故の影響の放射能などで住みにくい場所だ。」と、思っていました。しかし、この苦しい環境から立ち直ろうとする被災者の人たちの様子から僕の考えは変わりました。

請戸小学校に行って津波の恐ろしさを知って、当時小学校に通っていた児童のことを考えると心が痛くなりました。震災の恐ろしさと災害への備えが大切だと思いました・・・



震災からちょうど1年経った4月12日付けの朝日新聞にこんな記事が掲載されました。

東日本大震災発生から1カ月後、津波に流された岩手県陸前高田市の自宅跡で、海に向かってトランペットを吹いていた少女がいました。場所は瓦礫で覆われた岩手県陸前高田市。津波に流された自宅跡に立ち、家族を奪った海に向かってトランペットを吹いた後、涙ぐむ17歳の少女の写真から、世の中の人々、家族を失った子どもの存在を知らされたのです。

この写真は、朝日新聞の記事と一緒に掲載されたものです。少女は、津波で母と祖母を亡くし、祖父は行方不明のまま。「私は元気だから、心配しないで」と、そんな思いでZARD（ザード）の「負けないで」と「故郷（ふるさと）」を吹いていたそうです。

涙を拭きながら、祖母が買ってくれたトランペットを抱きしめている1枚の写真。地震発生の際は、学校の部活の吹奏楽部で練習をしていた彼女。大きな揺れの後、母親に急いで電話したら「あなたはここにいないさ。」それが最後の母親の言葉だったと話します。

この1枚の写真が、きっかけとなって、少女は東京オペラシティの舞台に立ちました。そして、聴衆約1500人を前に、あの日天国の母や家族に捧げた曲を再びトランペット演奏をしたのです。

あれから12年経ちました。家族を失ったとき、高校2年生だった彼女のその後の人生には、きっといろんなことがあったことでしょう。

写真の彼女が前を向き、今も元気に夢に向かって歩んでいることを祈ります。

今年1年、わたしたちは、当たり前は決してこの世には存在しないということを知りました。電気があって、ガスがあって、水道があって、食料があって、家があって、これはすべて当たり前ではないのだということ。

そして、もっと大切なこと。家族や友の存在も決して永遠ではないということ。

日常にある小さな出来事にこそ、目を凝らしてみることが『点描』の精神だと思って、書き綴りました。暮らしの中で、人と人が触れ合いながら感じた何気ない会話や出来事。その背景には、かならず自分を見守ってくれる、誰かがいます。

人間誰も決してひとりではない。それを最後に、今年度のたよりの筆を擱（お）きます。

「寒いね」と話しかければ、「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

俵 万智

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

1年間、手に取って読んでくださった方々に感謝の気持ちを送ります。

